

近松門左衛門の戯曲における通貨

阿 達 義 雄

On Current Coins in the Ballad Drama by
Monzaemon Chikamatsu

by
Yoshio Adachi

はじめに

最近、閑暇を得て、十何年前かに書き溜めた大判のカードを整理していたら、近松世話浄瑠璃24曲の中に見える貨幣関係の要語の例を記した一綴が現われてきた。

それで、思い出したことは、昭和22年刊の拙著『川柳江戸貨幣文化』には、宝暦明和以来の江戸川柳等に現われてくる貨幣や物価を中心として記したため、元禄享保の上方文学に現われてくる金銀銭貨には全く触れることができなかったことである。

その後、この方面の調査を纏めてみるつもりで、近松世話浄瑠璃の中から特に注意すべき当時の貨幣の要語例を書き抜いてみたことがあった。今、私の眼の前に偶然出てきたのは、その時の書き抜きの一綴であった。

昭和46年後、私は、なお、江戸川柳と江戸時代の貨幣、幕末明治文学と貨幣等に関する小著を刊行する機会を得たが、元禄文学に現われてくる貨幣研究については全くブランクの儘、今日に至り、もうこれから之について本格的な研究をするには年齢的に困難となり、時間的余裕もなくなってしまった。

このような事情で、今回出て来たカードを利用して、近松世話浄瑠璃の中に見える貨幣要語について、私見を記してみようと思いついた。

したがって、本稿は論文とか研究などというものではなく、「近松世話浄瑠璃における貨幣要語についての断想」というようなものであるが、中には今迄のこの方の研究大家の見解に対する疑義もあって、私はその小さな疑義を提示し、問題にするために本稿を草したというのが率直のところである。

江戸時代は金・銀・銭の三貨制の時代であり、幕府の公定比価によれば、金一両は銀六十匁、また金一両＝銭四千文、銭四千文＝銀六十匁とされており、江戸時代の幣制は、大局から見た場合には、関東は金本位制、関西は銀本位制という複本位制であり、銭だけが補助貨幣として全国に共通に使用されていたのであった。

上方文学の西鶴や近松の作品に頻々として銀貨幣、即ち丁銀や小玉銀が現われてきて、何十目又は何十匁などと銀目で表示されているのは、このためであり、銀貨幣や銭貨は一般に十進法で表示されていたが、金貨幣の一両未満は四進法で示され、一両の四分の一は一分、一分の四分の一は一朱として表示され、一朱未満の金額は通例「何文」という銭で示されていた。

(注1)
元禄の文豪といえば、松尾芭蕉、井原西鶴、近松門左衛門の三大家であり、普通、同時代の人

物と考えられているが、貨幣史の観点からみると、芭蕉、西鶴二人は慶長小判通用時代に活躍した人物であり、之に対し、その作品から見ると、近松は慶長小判よりも、元禄小判・乾字小判・正徳小判・享保小判の各時代にわたって活躍したという点において、西鶴や芭蕉とはかなり異なっていたと考えられる。

したがって、松尾芭蕉や井原西鶴の作品に現われてくる小判は（慶長前の古金は別として）、慶長小判に限られていたが、近松の世話物などは元禄16年から享保9年にわたっていたので、この間に流通していた元禄小判・乾字小判・正徳小判・享保小判などが、その作品の背景となつて、人物や事件を動かしていたものと考えられる。

このようなことは、当時流通していた丁銀や小玉銀についても言われることであつて、西鶴の作品に現われてくる銀貨幣は慶長丁銀、慶長小玉銀に限られていたが、近松世話物の世界を支えていた銀貨幣は元禄・宝永・永字・三ッ宝・四ッ宝・享保等の各種の丁銀と小玉銀であつた。

このような点から考えると、近松世話物に現われてくる貨幣要語は西鶴作品のそれよりは複雑であり、解釈には戒心すべきものがあると思われる。

I 近松世話物とその時代の金銀貨

近松世話浄瑠璃24曲の中の最初の作品は、元禄16年の『曾根崎心中』であり、その最後の世話物は享保7年の『心中宵庚申』であつた。

この間に流通していた金貨幣の種類は、

○元禄小判・元禄一分金 ○乾字小判・乾字一分金

○正徳小判・正徳一分金 ○享保小判・享保一分金

上の4種類であつたが、なお、元禄10年6月から宝永7年4月迄、元禄一分金の半値の元禄二朱金が通用していたものの、これは近松の作品には現われてこないようである。

また、井原西鶴の町人物などに描かれているのは、みな元禄小判流通以前の慶長小判の時代であり、一応、当時の実質的価値を知って置く必要があると思われるので、これ等を示してみると次のようである。（一分金については省略したが、一分金の実質的価値は、同種の小判の四分の一である。）

〔元禄・享保期通用の小判〕

| 名 称 | 通 用 期 間 | 量 目 | 金 (千分中) | 銀 (千分中) | 雑 (千分中) | 純 金 量 |
|---------|------------------------|-------|------------|------------|------------|----------|
| 慶 長 小 判 | 自慶長6年 至文政10年正月 | 4 匁73 | 862.8 | 132.0 | 5.2 | 15.3グラム |
| 元 禄 小 判 | 自元禄8年9月10日 至享保2年12月 | 4 匁75 | 564.1 | 431.9 | 4.0 | 10.05グラム |
| 乾 字 小 判 | 自宝永7年4月15日 至元文3年4月 | 2 匁49 | 834.0 | 165.5 | 0.5 | 7.8グラム |
| 正 徳 小 判 | 自正徳4年5月15日 至文政10年正月 | 4 匁75 | 856.9 | 142.5 | 0.6 | 15.26グラム |
| 享 保 小 判 | 自享保元年 至文政10年正月 | 4 匁74 | 861.4 | 135.5 | 3.1 | 15.3グラム |

。上の表は造幣局編、朝日新聞社刊の『貨幣の生ひ立ち』の巻末の一覧表に拠つて作成したものであり、「量目」は多数試験の結果の一個平均の量目及品位である。「純金量」は本表の金の千分率によって筆者が算出し、匁をグラムに改めたもの。

次に、近松世話物を当時の銀貨（丁銀・小玉銀）通用時代に充ててみると、大体、次のようになる。

〔近松世話浄瑠璃時代の丁銀・小玉銀〕

●元禄銀（元禄8年9月より通用）

- ・曾根崎心中（元禄16）・薩摩歌（宝永元）
- ・心中二枚絵草紙（宝永3）・卯月紅葉（宝永5）

●宝字銀（宝永3年6月より通用）

- ・堀川波鼓（宝永4）・卯月の潤色（宝永4）
- ・丹波与作待夜小室節（宝永5）・淀鯉出世滝徳（宝永5）
- ・心中重井筒（宝永5）・心中万年草（宝永5）
- ・五十年忌歌念仏（宝永6）・心中刃は氷の朔日（宝永6）

●永字銀（宝永7年3月より通用）

●三宝銀（宝永7年4月より通用）

- ・今宮心中（宝永7）

●四宝銀（正徳元年2月より通用）

- ・冥途の飛脚（正徳元）・夕霧阿波鳴渡（正徳2）
- ・長町女腹切（正徳2）

●享保銀（正徳4年5月より通用）

- ・生玉心中（正徳5）・大経師昔暦（正徳5）
- ・檜の権三重帷子（享保2）・山崎与次郎兵衛寿の門松（享保3）
- ・博多小女郎浪枕（享保3）・心中天網島（享保5）
- ・女殺油地獄（享保6）・心中宵庚申（享保7）

以上は、近松世話物のそれぞれの作品が、当時の銀貨幣の中の、どの種類の流通時に当たるかということ、を一応割り充ててみたものである。

したがって、実際においては、前の時代の銀貨幣と当代の銀貨幣とが併用されていた過渡期においては、以上の二種類の銀貨幣の混交流通状態が描かれていることもありうるわけであり、このような例は『心中天網島』（享保5）、『女殺油地獄』（享保6）に限られ、この二作には最近出された新銀（享保銀）と、それ以前からの四宝銀とが入り交って現われてくるので、このような場合の解釈には特に注意しなければならないところである。

Ⅱ 元禄享保時代の銀貨の価値指数

近松世話物は、元禄16年の『曾根崎心中』から享保7年の『心中宵庚申』まで、前後20年の24曲にわたっているが、この期間は徳川時代の前期においても、最も多種の銀貨幣が鑄造された時代であって、その名称は、同じく丁銀、小玉銀と言われていても、その実質的価値は、それぞれ多少異なっていた。

造幣局編纂の『貨幣の生ひ立ち』（昭和15年刊）を見ると、享保3年における米一石の値段を、この時代に通用していた各種の銀貨幣で示したものが掲げられており、これによると、米一石の値段は元禄銀では41.25匁、宝字銀では52匁、永字銀では66匁、三宝銀では82匁、四宝銀では133匁、享保銀では33匁となっている。

これによって見ると、享保銀の実質的価値が最も高く、四宝銀の実質的価値が最も低かったことが知られる。

それで、今、最も実質的価値の高い享保銀を基準として、その価値指数を100として、他の銀貨幣の享保銀に対する価値の対比を明らかにして置くと、各種銀貨の相対的価値が直観的に納得されて大変に便利である。

次にこの時代の各銀貨指数を一覧表にして示してみよう。

〔銀 貨 の 価 値 指 数 表〕

| 銀貨の種類 | 米一石の値段 | 価値指数 | 通用開始の年月 |
|-------|--------|-------|-------------|
| 元 禄 銀 | 41匁25 | 80.0 | 元 禄 8 年 9 月 |
| 宝 字 銀 | 52匁 | 63.5 | 宝 永 3 年 6 月 |
| 永 字 銀 | 66匁 | 50.0 | 宝 永 7 年 3 月 |
| 三 宝 銀 | 82匁 | 40.2 | 宝 永 7 年 4 月 |
| 四 宝 銀 | 133匁 | 24.8 | 正 徳 元 年 2 月 |
| 享 保 銀 | 33匁 | 100.0 | 正 徳 4 年 5 月 |

これ等の銀貨幣は、いずれも、この期間に通用が認められていたものであるから、近松世話物の中に、ただ「銀」とか、「丁銀」「小玉銀」「豆板」などとして現われている場合には、どの種の銀貨幣であったかは不明であり、過渡期にあっては旧貨と新貨とが併用されて、その実質的価値が比較され、いずれか一方の銀貨幣に換算されて通用されたものと思われるが、この例は『心中天網島』や『女殺油地獄』において見られるだけであって、近松世話物一般としては、このような種別に拘泥せず、自由に分り易く描かれている。

Ⅲ 『天網島』『女殺油地獄』に見える四宝銀と新銀

異なる二種の銀貨の現われてくる『心中天網島』の中の具体的な用例文を見ると、

「小春の命は、新銀七百五十匁のまさねば、此世に留る事ならず。今の治兵衛が四ツ三貫匁の才覚、打ちみしやいでも何処から出る。」

上の文において、新銀（享保銀）七百五十匁なければ小春の命をとり留められないのだが、その銀は四ツ宝銀なら三貫匁であるが、今の治兵衛にはどんなにしても、その才覚ができないだろうというのであって、この新銀七百五十匁＝四ツ宝銀三貫匁であったから、新銀（享保銀）は四ツ宝銀の4倍の価値があったことになり、このことは前章に示した銀貨の価値指数表を見ると、享保銀の指数は100、四ツ宝銀の指数は24.8となっているので、享保銀の価値は四ツ宝銀の約4倍であったことを確認することができる。

このことは次の文にもよく現われている。

「小春の方は急な事、そこに四々の一貫六百匁と、まあ一貫四百匁」と大ひき出しの錠明けて、箆笥をひらりと飛八丈……………さらへて物数十五色内ばに取て新銀三百五十匁、よもや貸

さぬといふことは無い物迄も……………

小春の命を救うために必要なのは新銀七百五十匁、これは四ツ宝銀にすれば、その4倍の三貫匁である。それで、そこに四ツ宝銀の一貫六百匁あるが、〈まあ一貫四百匁〉、即ち、四ツ宝銀でもう一貫四百匁が必要だと、大引出しの錠明けて簞笥から飛八丈その他浚って十五色もある衣類——之を内輪に考えても、これで新銀三百五十匁を質屋で貸さぬとは言わないであろう。つまり、この新銀三百五十匁というのは四ツ宝銀の「まあ一貫四百匁」にあたり、前の一貫六百匁と合わせると、合計四ツ宝銀三貫匁となる、というのである。

なお、『女殺油地獄』の中に四ツ宝銀の例として、

——主人の金四ツ宝三貫目余り引負ひ——というのがあり、また（油屋の）お吉が茶屋で休んで茶代を遣るのであるが、この条を近松の本文では、

——茶屋殿過分と袂より置く茶の銭の八九文、四分にはおもく、五分には軽々しげの物参り…とあり、この解について、日本古典文学大系の『近松浄瑠璃集』には、重友毅氏が注して、「正徳改鑄の四宝銀の質が悪く、銭の八九文が、銀の四分か五分足らずに当る意、気軽な参詣の意をかけた」とあり、若月保治氏の『詳注全訳近松傑作集』も、ほぼ同解であるが、なお、次のように詳説されている。

「此作は享保六年七月十五日に初演されたものだが、此頃はまだその八九年前の正徳元年八月から九月までに出来た四宝銀が通用し、それは正徳四年九月に出来た新銀に比べると四分の一の価値しかなかった。

即ち、四宝銀一貫目は新銀二百五十匁の割合で通用した。

之は享保五年に公にされた天網島の中にも、四つ即ち四宝銀三貫目が新銀七百五十匁に等しいと明らかに記されている。

此頃、幣制が慶長の旧制に復し、銭四千文は一両にあたり、千文は四分の一両、即ち一步にあたると算定せられ、新銀六十匁が金一両にあたるから新銀と銅銭とを比べると新銀は銭六十六文にあたるのである。

ところで、四宝銀は新銀の四分の一の価値しかないから、四宝銀一匁は銭十七文弱にしか通用せぬ。

即ち、一匁の十分の一たる銀一分は銭一文七分位である。だから銭八九文は四宝銀四分乃至五分位の見当にあたると見てよく、それ故、四分に重く五分に軽いといふのと、軽々しいとかけて此処の表白となったのである。」

とある。

この『女殺油地獄』の中に「新銀」「新」「上銀」などの語が次に示すように、下の巻に何箇所か見えるが、これらはいずれも正徳四年五月から通用になった享保銀（正徳銀とも言われている）である。

——此うちがひに新銀五百八十目、財布の銭も戸棚に入れて錠おろしや。

——貴様は留守でも判は親父の判、新銀一貫目、今宵延びると明日は町へことはる。

——新でたった二百匁許、勘当のゆりる迄貸して下され。

——金は奥の戸棚に、上銀が五百目余り、

——親父の謀判して上銀二百匁、……手形の表は上銀一貫目、借りた金は二百匁、明日になれば、手形の通り、一貫目で返す約束、

Ⅳ 一分小判・一角

江戸では小判といえば一兩判のことで、一分判金のことを一分小判とは言わなかったが、上方では一分判金のことを一分小判と言い、西鶴や近松の作品に屢々現われてくる。

すなわち、『冥途の飛脚』上には「一分小判や白銀に翼のあるがが如くなり」とあり、『博多小女郎浪枕』上にも「一步小判も八九両」など見え、なお、この作の中の長者経の中に、
——さつても^{しは}吝い長者あり。仏これを示さん為、朝な朝な^{ずだ}の頭陀の行、はっちはちちの空耳潰し、うんともすんとも言はれぬ仏の方便にて、光はさながら一步小判の山吹色……

また、『心中天網島』上巻の物尽しにも、

——紙屋の治兵衛、小春狂が杉原紙で、一分小判紙塵々紙で、内^{すきやれ}の身代瀉破紙の、鼻もかまれぬ紙屑治兵衛……

その他、近松の作品に見える一分（歩）とあるのは、みな一分判金即ち一分金である。

——懷中の有合はせ、沓歩十三服沙につつま、「これたしなみに持って居や」

（『丹波与作待夜の小室節』）

——貰ふた一步は百計、銀さへあれば何談合も仕易い。（『生玉心中』）

『生玉心中』の右の「一步」は、その後が続いて、「銀さへあれば何談合も仕易い」とあるので、よく一分銀と解されるが、元禄享保時代には未だ一分銀も二朱銀も一朱銀もなかったのだから、この一步というのは一分金である。

次に「一角」という語は、

——「私等は夜昼あがいて三百は儲けかねるに、よう飲んだとて一步取り、よう笑ったとて二歩取り、両肌脱いでこそぐられ、鼻の穴へ胡椒入れて、くしやみをしても一角、いかな鯉でも鮒でも一蔵あかう。」（『淀鯉出世滝徳』）

——「今日の女も^ふ房ではない、人おきの娘を一角で頼んだ。（心中重井筒）

——「やっちや^ふ角せしめん」と人の巾着^{あて}当にして貰はぬ先の締め括り（『博多小女郎浪枕』）

以上に見るように、一分金は一角とも呼ばれたが、遊里などでは、洒落的な表現として一角と言われることが多かった。

Ⅴ 一分銀と一分金

近松世話物に限らず、元禄享保の文学に一分銀とか一朱銀などが現われてくる筈はなかった。それは、この時代の銀貨幣は、取引きの度に秤にかけて、その重さを計り、その重さを以てその価値を現わし、秤量貨幣——五匁とか、三十目などと呼ばわれていたからである。

ところが、近松世話物の解釈に、よく一分銀などを持ち出して解釈をしているのが見られる。

例えば、『生玉心中』の中に、「貰うた一步は百計、銀さへあれば何談合もしやすい。」という文があるが、若月氏はこの解釈を、「貰った一分銀は百ばかりである。銀さへあれば如何なる相談も仕易いことぢや」とされている。

これは「銀さへあれば」とあるので、貰った百ばかりの銀を文字通りに銀の一步、すなわち一分銀と考えたのであろうが、これは旅費が銀貨でなくとも、慣用的に旅銀と言われる類であった、当時、一分銀のなかったことを考えてみれば、これが誤であることが知られよう。

また、同じ『生玉心中』の中に次のような一節がある。

——「丁度飲め」と瓢箪傾け注ぎかくる酒にはあらぬ麴の色、花の沓歩のからからから、さらさらさと七八十、皿うづ高く盛りあぐる。——

同氏は、この「麴の色、花の一分」の注として、「麴の色——純白にて、銀貨をさす。花の一分——上の麴の花をうけて言ったので一分銀のこと」と解釈されているが、これは注者が、元禄時代に一分銀が通用していたと思っていたことや、麴の色が純白であると誤認していたことに拠る誤だと考えられる。

麴の色は白くないとは言われないが、決して純白ではないようである。今、念のために『広辞苑』を見ると、「麴花——蒸した米に麴菌が繁殖して胞子がつき、淡黄色になったもの」とあり、「辞苑」には「麴色——黄に赤味を帯びた色」とあるから、この麴の色というのは、むしろ黄金色を想起させるものであって、問題の一節は黄金色の一分金を皿の上にカラカラ、サラサラと七八十片をうづ高く盛りあげたと解すべきであろう。

また、若月氏は『心中万年草』の中の詞堂銀（正しくは祠堂）について、「一枚は普通に一分銀のことをさす。四分が一両にあたる」と注されているが、この一分銀というのも誤であろう。

——詞堂銀五百枚奉納いたされ候。御受納あつて末世末代、不退転の御回向頼みな存候と包みの白銀、目録添へて渡しければ……

この後を読んでみると、祠堂銀を奉納した大名方の者が、寺の方から善美を尽くして御馳走や待遇を受けている点から考えても、祠堂銀五百枚が一分銀五百枚などでなかったように考えられるし、第一、前述のように、この頃には一分金はあったが、一分銀などはなかったのである。したがって、この銀五百枚というのは丁銀五百枚であったとすべきであろう。

Ⅵ 丁銀・豆板と銀一両

『堀川波鼓』『冥途の飛脚』『心中天網島』などに現われてくる次の例文中の「銀」「銀子一枚」「銀一枚」が丁銀を意味していることは諸家の注において一致しているところである。

——旦那様へ銀十枚、内儀様へ疋歩五ツ、私等までつらりと三百宛…（『堀川波鼓』下）

——涙の隙に巾着より銀子一枚取出し……（『冥途の飛脚』）

——福島の西悦坊が仏壇買う奉賀、銀一枚回向しやれと遣つたも、（『心中天網島』下）

また、豆板又は小玉銀は『大経師昔暦』の中に、

——是一步二つ、白銀も少しある、

——二三匁の豆板二つ、吞ませぬ樽の口ふさぎ……

——おのれに粒三文もかった覚えはない。

のように記されており、この最後の「粒三文」は粒銀三つの意であつて、『心中天網島』下の「磯都が花銀五つ」、『心中重井筒』上の「豆板一粒はつとはずみ」なども、みな豆板銀の例である。

ついでながら、前述の丁銀、豆板等について、拙著『江戸川柳貨幣史』の銀貨編に記した解説を引用して置こう。

「………当時、その量目によって行使する銀貨幣としては、大きいものには丁銀、小さいものには玉銀があつた。玉銀は小玉銀、豆板、豆銀等いろいろの名をもって呼ばれていた。

慶長六年五月制定による丁銀及玉銀は、『大概丁銀一枚は四十三匁内外、長くして海鼠なまこの如し、常是の字、宝字及び大黒の像等の極印あり、豆板は極印之に同じく、其大きさは或は指頭の如く、或は菰粒（注2）の如く、率ね矮円なり』（『貨幣通考』）と記されている。

銀貨幣鑄造の銀座は大黒常是家の司るところゆゑ、＜常是＞＜宝＞及び大黒天像の極印は、その品位証明のしるしとして打記されたのであつた。

なお、丁銀も玉銀も、その行使に当っては、むき出しのまま用いられることは極めて少な

く、大抵紙に包み、包銀としていたようである。

玉銀の大きさについては、『守貞漫稿』に、＜碎銀重さ不定、大略一粒四五分より五六匁に至る、碎銀俗に豆板と云ふ也。今の京坂、俗に是を小玉と云ふ＞」

銀一両

丁銀や豆板（玉銀）等については、あまり異論も見られないが、問題になるのは『槍の権三重帷子』の中に出てくる「銀一両」である。すなわち、

——此乳母の働きで、一夜の枕をかはさせた其礼に権三様より雪駄一足、銀一両是が証拠。

この「銀一両」について、若月氏は＜此当時金一両は銀六十匁＞と注されているが、金一両＝銀一両ではないので、この注は意味をなしていないように思われる。

ところが、日本古典文学大系の『近松浄瑠璃集』上において、この「銀一両」の注として、重友毅氏は＜銀貨で四匁三分をいう＞とあるが、その根拠を示されていない。

それで、念のために『日本国語大辞典』（小学館）によって銀一両を調べてみると、＜銀四匁二分を一として、銀を勘定する時の単位＞とあり、その用例として、西鶴の『好色一代女』6の1の＜是がお氣に入らず^いち^ち両^{りやう}の銀子は私がまどひます＞を挙げているので、日本古典文学大系の『西鶴集』下の「好色一代女」を読んでみたら、次の一文に逢着した。

○又暗物といふは、恋の中宿によばれて、かりそめの慰みを銀二匁、中にも形の見よきに衣類のうつくしげなるをきせて、銀^いち^ち両^{りやう}とすこし位^{ぐあい}を付置ぬ。

また、この「銀^いち^ち両^{りやう}」「^いち^ち両^{りやう}の銀子」の語に対し、麻生磯次氏は、いずれも「銀四匁二分」と注されており。この注は『日本国語大辞典』の解と同様である。

だが、岩波の『辞苑』、および『広辞苑』には、銀一両は銀貨で四匁三分とあって、重友毅氏と同説である。いずれも権威ある辞書と著名学者の説であり、その差は僅か0.1匁即ち一分に過ぎないが、之は丁銀の源泉と関係がありそうなので、黙過できないところである。

これについて、想起されるのは、『経済録』に見える「銀丁は十両を挺とす。重さ四十三銭也。俗に丁銀」の一文である。これは丁銀一挺が十両、この十両が四十三銭（匁）だというのであって、すなわち銀一両は四匁三分となる。

したがって重友説、「広辞苑」説が正しく、麻生説、「大日本国語大辞典」説は誤ではないかと考えられる。尤も、日本古典文学大系「西鶴集」上の巻末の補注をみると、『経済録』の所要箇所が引用されているから、此処の四匁三分を麻生氏等が四匁二分と誤認し、この誤認による誤記を日本国語大辞典がその儘踏襲したものであろう。

最後に銀一両について、江戸学の大家たる三田村鳶魚翁の説を紹介してみよう。

銀一両と丁銀

——銀の一両という言葉を使っておりますが、これは四匁三分です。金の一両は^(注3)四匁と押えてありますが、銀の方は四匁三分になっている。銀一両、金一両と二通りあるわけです。この銀の十両を一挺と言いました。これは丁銀というので四匁三分が十だから四十三匁ということになる。

然るに金一両に対して銀六十匁という立て方になっておりましたから、丁銀十両四十三匁では金一両に足りない。

そこで、豆板、こまがね小粒銀と色々呼ばれておりました小さな銀玉がある。それを足して六十匁にして、包んでおいたのです。

これは金一兩に対して、銀六十匁にして使う時の話ですが、そうでない時は目方がきまっていないから、一々秤にかけなければならぬわけです。

銀一兩四匁三分、丁銀一本四十三匁ということは、外国貿易の関係で生まれたものらしいですが、委しいことは知りません。（『江戸読本』第3巻第3号、昭和15年2月、通貨の話）

VII 三百貫の脇差・三千貫の一腰

『長町女腹切』の中に〈三百貫の脇差〉という語が見え、『山崎与次兵衛寿の門松』の中に〈三千貫の一腰〉という語が見える。

この三百貫、三千貫は、三百貫文（銭の場合）、三百貫目（銀の場合）又は、三千貫文、三千貫目の省略語であるから、この刀の値段を正しく解するには、これらの名数詞が銭の値段か銀目かを明らかにしなければならない。

まず、『長町女腹切』（正徳2年）の中の所要箇所を引用してみると、その上の巻に、

——此の脇差を売りに来て、諸傍輩のつきあひに、祖父様も望みにて、買ひ求めたい志、彼の
高木も望みをかけ、代物問へば三百貫の折紙……此の脇差を買はいでは一分立たぬ祖父様
の、武具馬具衣裳夜^{しろ}の物まで代なして、三百貫の折紙代一倍まし、二百拾兩に買求め……

これは、要するに、この脇差を売りに来たので、祖父様も他の者も之を欲しがって、代価を聞いたところが、三百貫の鑑定書がついているという……他^{しろ}の者に買われるのも残念であり、高価だからといって引込んでしまつては一分が立たぬというので、祖父様は武具馬具衣裳など迄売り払って、三百貫の倍額六百貫、即ち二百拾兩で、その脇差を買ひ求めたというのである。

上の文によって分っているのは、六百貫が二百十兩であたっているということであるが、もし、この六百貫が六百貫目（匁）即ち、銀六百貫匁であつたとするならば、金一兩は銀2,857匁となる。

ところが、金銀の公定比価は金一兩＝銀60匁ということになっていたから、60匁の約47倍のこの2,857は、銀目ではなく、銭2,857文だと考えられる。

当時の乾字小判の重さは、元禄小判や正徳小判の4匁75分に対して、2匁49分の小形であつたから、之に相当する銭も、他の小判に相応する4,000文よりも、ずっと安かつたであらう。

また、この『長町女腹切』の中の巻に、

——そなたが手取にあたたまれば兩為と思ひ世話やけど、売買高い此節二貫目ちかい廿兩……とあるので、この頃、銀二貫目が約廿兩、即ち銀百匁が約一兩であつたことが知られる。

ところが、前に一兩＝銭2,857文で、金貨（一兩小判）に対して、銭が大変に高くなつていた。

また、今度は銀百匁＝一兩であるから、銀（貨）が金（貨）に対して、その値段が大変に下落していたことが知られる。というのは、この頃通用していたのは価値指数24.8の四宝銀で、元禄から享保にかけて最も粗悪な銀貨であつたからである。（之については銀貨の価値指数表参照）

以上を総合してみると、この頃^(注4)の金・銀・銭の価値の比は、◎金1兩＝銀100匁＝銭2,857文であつたことになり、これを公定比価の

◎金1兩＝銀60匁＝銭4,000文

と比較してみると、大分異なるが、これは宝永7年に出された小型の乾字金や、正徳元年に出された粗悪な四宝銀などの影響によるものであらう。

次に『山崎与次兵衛寿の門松』（享保3年）を見ると、次のような一節が見える。

——身請の代金此一腰、三千貫の折紙と共に投出す形恰好、……

(身受けの代金は此一腰の 刀だというので、三千貫の鑑定保証書と共に投出すその恰好は……)

この三千貫が銀目だとすると、公定比価の銀60匁＝金1両に抛って、両に直してみると、五万両になる、身請代金に五万両などという巨額は江戸時代に考えられなかったことであった。

したがって、この三千貫は銀目の三千貫目(匁)ではなく、銭の三千貫文と考えるべきであり、銭三千貫文ならば(公定比価の1両＝4,000文に従えば)金七百五十両である。これなら身請代金として考えられない金額でもないであろう。

なお、三百貫文、三千貫文に因んで、近松世話物に出てくる銭の色々な称呼について附記してみよう。

* * *

『女殺油地獄』中巻に、油屋仲間の山上講の若者達が、その下向に河内屋徳兵衛の店の店前に立ち寄った時、与兵衛の義父の徳兵衛が走り出て、

「若衆下向か殊勝にごさる。こちのどろめは山上参りの行者講のと、今年も身共が手から四貫六百、順慶町の兄太兵衛から四貫、以上十貫近い銭取って、どこどこに迎へにも出をらぬ。

神仏の罰も思はぬどろく者、友達がひに引きしめて、意見頼みまする。」

この文の四貫六百、四貫は山上参りとか行者講とか言って、親や兄から巻き上げた合計<十貫近い銭>とあり、また、この前後の意味から考えても、これは当然銭であったことが知られる。

次に『夕霧阿波鳴渡』中巻に見える「師匠と思召し、御褒美にこの鳥目百疋下さるる」とあるが、この<鳥目百疋>とは銅銭千文、即ち一貫文のことである。

なお、『淀鯉出世滝徳』に見える<百銭>は百文のことであり、『丹波与作待夜の小室節』上巻に出てくる<銭三筋>^{さし}というのは、百文の緋三本に通した銭——三百文のことである。

ここで注意すべきは、江戸時代に銭を数えるに百文を百文とする長百(普通の数え方)と、九十六文を百文とする省百勘定とがあったことである。

この例は『心中万年草』上巻にあって、「矢張り九十六文で、百宛遣って置かしやれ」と見える。

これは九十六文を百文として数え、(何人かの者に)百文ずつ遣って置けというのである。

元禄享保時代の銭といえば、一文の青銅貨に限られ、四文銭(浪銭、青銭)が用いられるようになったのは明和時代からである。^(注5)

お わ り に

本稿を成すために、近松世話物における貨幣関係の要語について、諸家の注解に当たってみたのであるが、問題になる語について、元禄時代の貨幣制度、或は貨幣史的な立場から考察しているものは稀であって、ただ、その時、その時に 出てくる 貨幣要語の 注解を試みているだけなので、どのような根拠から、そのような解釈を採ったかということを知ることができなかった。

また、私が奇異に感じたことは、元禄享保時代にも、一分銀とか一朱銀などの標記貨幣があったとして、何ら疑うことなく、そのような立場から文を解釈していた二、三の知名学者もあったことである。

尤も、『心中天網島』や『女殺油地獄』には研究的な注釈書が公刊されているので、<四ツ宝銀>や<新銀>については誤っているものはなかった。元禄享保時代の貨幣要語の中でも、研究問題として興味のあるのは<銀一両>と<金一両>であるが、これについて分り易く、その区別

を述べていたのは、三田村鳶魚翁だけであった。

ただ、何故、金一両が四匁で、銀一両が四匁三分であるかという理由や、両者の関係については三田村翁も触れられていなかった。

丁銀は43匁で、これは銀10両とされていた。

これに対し、慶長大判の量目は43.91匁となっているから、元の大判の量目は丁銀の43匁に近かったのではないであろうか。^(注5)

即ち、初め、丁銀一枚は（金の）大判に相当していたが、享保大判になると、大判は小判10枚ではなく、享保小判の七両二分替にされたために、銀一枚と金一枚との関係が不明になってしまったとも考えられる。

これについて参考になるのは、草間直方の『三貨図彙』の所説である。すなわち。

「黄金一両といふも、天正年代は代銀四十三匁、又、銀一枚といふも今の如く四十三匁にて、黄金一枚の代銀は四百三十目なり。その他は皆切り遣いの金銀にて、量目のみ通法あり。」とある一文で、これによると、天正年代には、金一両は銀四十三匁であって、黄金一枚（大判）は銀十枚、即ち430匁であったことになる。

大判一枚（十両）は丁銀十枚の430匁に当たっていたことになり、当時（天正頃）、大判（金十両）と丁銀の比価は10：1であったことが知られる。

ということは、金43匁の価値は銀430匁に相応していたことになる。（秀吉の時代に金銀の比価が10：1であったことは、『歴史読本』第19巻第7号において、瀬戸浩平、松好貞夫の両氏の述べられているところである。）

なお、大判の量目（これは純金の他に銀その他の雑分が含まれている）を四十四匁とする由来については、

「今大判を掛け目四十四匁とするは、凡そ往古山出しの金、掛け目百目、是を鍊精する時は、焼詰金八十八匁、銀十二匁となる。

其の八十八匁を折半して四十四匁を得る。則ち四十四匁は焼き詰め[〃]の精金なり、又折半するは通用勝手よき為めなり。」（『教門私記』）

とある。

この説は雑分には触れていないが、興味ある資料だと考えられる。

〔注1〕

（注1） 例えば（一朱は250文であるから、）200文は一朱未満なので、「一両三分一朱と200文」というように称える。

（注2） 菽粒＝豆粒

（注3） 三田村翁が「金の一両は四匁」としているのは、慶長小判、享保小判等の標準的な良小判に含まれていた純金量が四匁であったことを云うのであろう。

（注4） 金1両＝銀100匁＝銀2857文……これは近松本文の「売買高[〃]い 此節二貫目ちかい廿兩」というような概算によって算出したものであるから、精密なものではなく、図式的なものである。

（注5） ただし、宝永5年に大型銅銭の宝永通宝十文銭が出されたが、評判が悪く、翌六年一月に廃された。

（注6） 慶長大判の量目43.91匁……これは、造幣局編『貨幣の生ひ立ち』の巻末附録「徳川幕府貨幣表」に拠る。滝本誠一著『日本貨幣史』には、慶長大判について「大判は量目44匁、品位50或は52、即ち純金38.72匁或は36.8匁ありて、雑分は銀及銅を混入したるものである」と記され、瀬戸浩平著『貨幣の文化史』には、「慶長大判は品位671、重さ44匁」とある。